ISSN 2758-6847

「鹿児島の近現代」教育研究センター

近現代センター通信

第５号　2025年3月

—目　次—

危機の時代における海外へのまなざし（松田忠大）　1
＃昭和99①木脇藤次郎が見た昭和（丹羽謙治）　3
②知覧の戦中・戦後（伴野文亮）　4
③昭和の鹿児島：経済成長への『開発』と人々の生活（日髙優介）　5
④終戦直後の鹿児島と奄美出身者（中嶋晋平）　6
⑤地域シンポジウム　沖永良部の昭和（澤田成章）　7
⑥鹿児島が生んだミステリ評論家中島河太郎（鈴木優作）　9
カターニア大学・フィレンツェ大学・ボローニャ大学講演レポート（鈴木優作）　10
口之津・大牟田・荒尾・盤山：鹿児島県の「移住」をめぐる問題提起（日髙優介）　11
世界に誇る鹿児島の食文化～桜島大根～（加治屋勝子）　13
明治40年の『鹿児島県写真帖』（小林善仁）　15
資料『大牟田・荒尾地区与論会だより』について（藤村一郎）　17
川路家本家・川路利行について（下豊留佳奈）　18
実業補習学校を知っていますか（竹村茂紀）　19
鹿児島城下の西郷家屋敷について（友野春久）　21
吉田初三郎が描く大口町鳥瞰図（吉満庄司）　23
寄贈資料・今後の予定　29

秋のシンポジウム「〈危機〉の時代における海外へのまなざし—明治と現代、そして鹿児島—」の開催

「鹿児島の近現代」教育研究センター　副センター長　松田 忠大

「鹿児島の近現代」教育研究センターは、2025年11月4日に鹿児島大学稲盛会館において、「〈危機〉の時代における海外へのまなざし—明治と現代、そして鹿児島—」をテーマとした秋のシンポジウムを開催した。本シンポジウムは、明治初期にわが国が行った西洋の制度の導入、外国人材の活用法を明らかにしながら、〈危機〉の時代を克服した先人たちの行動を踏まえ、今後の日本および鹿児島が構築すべき外国との関係、とるべき経済や地域の活性化策についての提言を導くことを目的としたものである。

この目的にしたがい、「お雇い外国人」研究で優れた研究業績を有するアメリカ・ミシガン大学のロイ・ハナシロ名誉教授と、鹿児島において観光業を展開されている島津興業株式会社代表取締役で島津家第33代当主の島津忠裕氏を、基調講演の講師としてお招きしてご講演いただいた。基調講演の後には、ハナシロ名誉教授、島津忠裕氏に加え、外国人材の活用や多様性を意識した社会づくりに貢献されている株式会社清友・株式会社ミエルカ代表取締役の宮之原明子氏、および姶良市クリエーティブアドバイザーのサンディー・ユハス氏をお迎えしたトークセッション「近代の鹿児島と現代の鹿児島における世界の見方」をテーマとしたトークセッションを行った。

ハナシロ名誉教授の講演では、明治期における造幣局の設立を素材に、明治政府は、欧州の法や契約の概念を認識した上で、お雇い外国人と良好な関係を構築できたことが、急速な近代化を成功させた理由の一つであることなどが紹介された。また、島津氏の講演では、薩摩藩の近代化と

それに向けた島津家の様々な取組が紹介された。これらの基調講演を踏まえたトークセッションでは、わが国の少子化や都市部への人材流出が、わが国や鹿児島における最も深刻な危機であるとの指摘がなされた。また、わが国では先人たちが、外国人材を有効に活用して、幕末・明治初期に到来したわが国の独立を脅かすような危機を乗り越えたこと、現代においても、外国人材を活用することにより、企業の経営危機のみならず、国家の経済危機を乗り越えた事例があることが紹介された。これらのことを踏まえたシンポジウムの総括として、登壇者から、少子化や地方の過疎化による地域的課題を乗り越えるためには、多様な人材を受け入れられる社会づくりが不可欠であるとの提言がなされた。